

福井大学訪問 文部科学省活力ある学校づくり推進事業有識者会議

- 1 期日 平成28年12月20日(火) 8:00～
- 2 場所 福井大学教職大学院
- 3 参加者 松木健一先生 宮下 哲先生
花岡ひさ江先生 山田勝由紀主幹 高橋 卓主幹 竹内良之 小林哲也先生

4 内容

(1) プレゼンテーション

「岡谷スタンダードカリキュラム“岡谷「ひと・もの・こと」教育”」
～岡谷ならではの学び～ について …竹内 小林

(2) 岡谷スタンダードカリキュラムに関する意見交換

《松木先生より》

ふるさと学習は全国のあちこちでやっている。福井でも敦賀市で敦賀科を立ち上げ、副読本をつくり地域学習を行ってきた。→でも、うまくいっていない。

- ・なぜふるさと学習なのか…都市部への一極集中により地域が痩せていくことへの対応。
→松木先生の娘さんも、都市部でキャリアをつけて働くことにより、結婚する気もまったくない。
それに対して…地域そのものが創成していくことを願って。
- ・学校統合とは…地域づくりのきっかけ
→統廃合には大反対が起きる。
→学校統廃合は新たに地域をつくるということの宣言。

- ・ふるさと学習は子どもたちのアイデンティティー
→そのためには、それを伝える大人たちが地域を活性化して作っていかなければならないんだと思うことの相互性。つまり、子どもと大人のお互いが育っていくという相互性が生まれないと難しい。
今までは、「子どもが地域を学ぶ、知る」という一方行だった。
→そうではなく、大人たちも変わらなければいけない。
そのためには、自分の地域をもう一度、見直し、伝える。
→そのよさを大人が再確認していく。
- ・岡谷の地域創生は…「子どもとの関わりを通して、大人と子どもの両方が育っていく。」
このことを明確に位置づけていくのがよいのではないか。
→教育大綱やスタンダードカリキュラムのプレゼン、リーフレットなど、「地域のよさを子どもに伝える中で、大人自身がそのよさを見直していくんだ」ということを文章に入れる。



- ・片倉兼太郎…この人のよさを言える、「今を生きる人」がいて、子どもたちが生かされる。
兼太郎に思いを寄せる「今の人」の思いを子どもたちが聞くことで、子どもたちが生かされる。
そして、このような、その人に思いを寄せ、それを子どもたちや地域に熱く語る「今の人」が増えていく。そしてまた、そのような「今の人」が他の人たちにも働きかけていく。
→片倉兼太郎について「語る人」を学習の中に登場させたい。
そして、この「語る人」自身が、成長している姿を子どもたちが見る。

- ・学校を創るということは…地域を創るということ。

→新しい地域を創っていくということが、学校統合。

→プレゼンの中に出てきた子どもの発言の吹き出しと同列で、大人の学びの吹き出しを入れていきたい。子どもと同時に大人にもこんな学びがあるよと。その両方を並べて示していく。

《宮下先生より》

ワンサイクルで終わるのではなくて、活動が続いていくように。

岡谷の地域学習 → 日本の産業 → 外国のこと → 社会問題

→ 自分のまわりの身近な問題 → わたしたちのまわりにいる大人

そして、わたしたちのまわりにいる大人が、学校の教育課題に入ってくる。

→学校の教育課題に地域の人が入って来られる仕組みをつくる。

《熟 議》

●松木先生

「ふるさと学習をしたから活性化」ではない。学校を起爆剤にしながら地域を創る。

→一例として、保護者が授業研究を教師と一緒にやっていく。参観日に来た保護者は我が子だけしか見ていない。そうではなくて、保護者にも子どもの見方を身につけてもらい、自分の子どもではない子の学びの姿を語ってもらう。研究会の司会を保護者が行う。自分の子どものいる学級以外の学級の授業も見ると、など。

→地域のあちらこちらでの出会いの中で地域の人と子どもたちが一緒にやっていく。

→いろんな大人と子どもの出会いの中で、大人も子どもも学び育つ。

→一例として、地域の人たちが学校で授業をする。店舗を開くかのように、茶道、得意分野で。

◎学ぶことが楽しい

→「**大人も子どもも、学ぶことの楽しさを相互性に成長していく岡谷**」

●宮下先生

それには、お互いの声が聞こえてくるというのが大事。

→学校現場で自己実現したい人の集まりになってはダメ。

→ワンショットではなく、2年～3年後の見通しをもって。

●松木先生

片倉兼太郎の歴史学習について…「兼太郎はこんないいことをした。でも、悪いこともした」では、自分事にならない。兼太郎が生きていたら、「わたしが戦争に荷担したことは間違っていない」ときっぱり言うだろう。現代を生きているわたしたちは、戦争は間違いだったって知っているから矛盾する。

つまり、今の子どもたちは、兼太郎とは違った土俵の上に、今いるのだから判断できる。

兼太郎とは違ったフレームで。子どもたちが、この違った土俵やフレーム気づくことで、自分事になっていく。

だからこそ、「片倉さんから、わたしは〇〇を学んだんです」と語る今、生きている人の語りを聞いたら、子どもたちはハッとすると。

一例として、

徳川家康 … 江戸時代

自分自身 … 現代

家康と自分の性格や心情の違いを直接比べる ←→ 時代や文化の違いを比べる →この両面が必要。

一例として、子どもたちが他の学校の子どもたちの学びの様子をみることで、劇的に変わっていった学校がある。

【今後の展開として】

文科モデル事業の研究の柱

- ① 岡谷版コミュニティースクールの推進
- ② 公開授業研究校の育成
- ③ 岡谷スタンダードカリキュラムの推進

●松木先生

竹内、小林の両先生が、来年度、他の学校にも出向くことができるのか。二人が他の学校に出向き、岡谷スタンダードカリキュラムについて、先生方と交流をもつ。それが大事になってくる。

●竹内先生

新しいものにふれる際に生じる先生方のアレルギーを最小限に抑えながら進めていくには…。

●花岡先生

OEE、校長会での研修や伝達などの取り組み、市の悉皆研修会

→来年度の夏の悉皆研修会は、岡谷スタンダードカリキュラムの取り組みと岡谷市の学力向上に関する取り組みの実践報告と、それを基調とした熟議を受けて松木先生にご講演いただきたい。

→小学校の先生方の授業充実と中学校の先生方の授業改善

●竹内先生

これからの子どもたちに、社会に、日本に、世界に、岡谷に、時代に、岡谷スタンダードカリキュラムやコミュニティースクールのような総合的・横断的な学びの場やスタイルが必要だということを先生方が実感できるようにねば…。

●松木先生

校長会などをととして、岡谷でやろうとしている取り組みの重要性や必然性を校長先生方にご理解いただき、それぞれの学校で先生方に伝えていただく。校長会で取り組みを情報交換し合う。できるところから一歩ずつ。

【往路（車内）における話し合い】

福井までの往路、長時間、松木先生と岡谷スタンダードカリキュラムや様々な話題について話し合うことができた。翌日の有識者会議にて、車内での内容をもう一度、松木先生が復唱してくださったので、話題は上記に含まれている。その上で印象深い内容を記す。

◇多くの市町村でふるさと学習を行っているが、みんな立ち行かなくなっている。それは、地域の歴史や文化を学ぶことが目的になってしまっているから。大切なのは、人と出会うこと。地域の「もの」や「こと」に思いを寄せている人に出会い、その人の思いにふれること。

→その話を受けて、この日の午前中に行った4年生のイルフ童画館見学の様子を伝える。

＜統合企画日誌 12月19日（月）より抜粋＞

4年生の図工で、イルフ童画館見学に同行した。子どもたちが、武井武雄の鳥の連作を題材として線彫り版画に挑戦するというので、実物を見に行った。「百聞は一見に如かず」その作品を生で見るだけでも価値がある経験だが、それ以上に、子どもたちの想像を掻き立てたのは、学芸員さんの説明だ。学芸員さんが絵の説明や自らの思いを子どもたちに語ってくれる。そのことで、絵の向こう側に武井武雄さんが広がっていくのだ。帰り際、4学年の図工担当の熊谷先生が、学芸員さんに、「子どもたち、上手くできるか分かりませんが、作品が完成したら持ってきますね」と語りかけると、「うれしい。楽しみにしています」と、本当にわくわくした学芸員さんの言葉と笑顔が返ってきた。本物にふれた活動を通した子どもたちの作品は、そうでなかったものと比べ、格段に生き生きとしたものになるだろう。

→この事例を嬉しそうにお聞きになった松木先生が、「本当に、その通りですね」とおっしゃる。